

在宅若年性認知症者の弄便行動に対する 応用行動分析学的介入の一例

宮 裕昭* 市立福知山市民病院
鑪 直樹 市立福知山市民病院
大川 一郎 筑波大学大学院人間総合科学研究科

本研究の目的は、在宅介護場面における若年性認知症者の弄便行動に対し、以下に示す応用行動分析学的な介入の効果を検討することである。対象者はピック病による認知症を患っており、便失禁時の排泄ケアが遅れると弄便行動を生じるようになった。このため、介護者が食後にトイレ誘導を行うことで排便や排泄ケアの習慣化を試みたが、便座に抑制したこともあってトイレ誘導に抵抗するようになり、弄便行動が増加した。これに対し、確立操作（好みの音楽の視聴制限）と強化手続き（排泄介護に応じた場合のみ、好みの音楽を視聴させる）からなる介入を行ったところ、トイレ誘導に穏やかに応じるようになり、弄便行動が減少した。そして、この効果は介入終了後も長期にわたって維持された。

キーワード ⇒ 弄便行動, 応用行動分析, 若年性認知症, 確立操作, 強化